

受験番号			

二〇二四年度 神戸山手女子中学校 中期午前 適性検査型入学試験

言語表現

(1ページ～14ページ)

09:00～09:40 (40分)

注意

- 一 検査開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二 声を出して読むではいけません。
- 三 解答用紙は一枚、両面印刷です。
- 四 検査の開始後すぐに、問題冊子のページがそろっているか、解答用紙が入っているか、確認しなさい。
- 五 受験番号を解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 六 答えはすべて解答用紙にていねいに記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 七 文字数を数えるときは、句読点や記号も一字として数えます。

神戸山手女子中学校

1 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

ゲームを楽しむためにある①「ルール」が果たす機能は、三つに分けることが可能です。

一つは「空間・時間・人数・形式」などの物理的な条件に関する「公平さ」と「共通化」です。全員がスポーツについて共通の理解をしておかなければ、「一緒に楽しく遊ばせんから」。

第二に「暴力を抑制すること」です。暴力的では楽しく遊ばせんからね。

以上の二つに収まらない項目を集めて、「その他」という三番目のグループを作ると、このグループが妙なものの集まりであることに気付きます。ここに収まっている各条項は、何のためにあるのだろう、と分析すると、何と（！）得点や勝利することを「難しくする」ためにあることが分かります。そして、どうもこの「やりにくい条件」を作り出すことがルールの重要な機能なのです。

（A）はなぜ手が使えないのでしょうか？（B）はなぜボールを前に投げてはいけないのでしょうか？（C）は、なぜダブルドリブルを禁じているのでしょうか？そこには、理由らしい理由などありません。これらは、単に「得点するのを面倒くさくする」以外に存在する理由はないのです。

なぜでしょうか？実は、答えは意外に簡単。最初に確認したように、ルールは「楽しんでプレー」するためのものだから、「面倒にすることが、楽しむために必要」だからなのです。これが②スポーツの基本的な考え方です。ちよつと不思議な感じがするでしょう。

「ボールを前に投げることはOK」にしてしまうとラグビーは楽しくない、と思った人たちが集まって、それを「反則」にするのと合意したのです。オフサイドがなければ、サッカーの魅力は半減すると思った人たちが、同じくそれを「禁止」として合意したのです。これらのルールに記された具体的な条項には、「何がおもしろいのか」を判断したうえで、競技の参

加者によって検討した結果、皆で合意したという歴史的な背景があるのです。そこを理解しておくことは、スポーツを理解するうえで最も重要なポイントです。

何しろ、③「こうといった背景はルールの中に文章として書かれていませんので、それ自体はルールではありません。しかし、プレーする人は事前に理解しておく必要があります。書かれていないけれど、前提になっていること、それが「原則」というものです。

例えば、商売をする人が契約をする場合、契約する当事者どうしには、そもそも「契約は守るもの」という原則が事前に了解されていなければ契約をしても意味がありません。「嘘をつくな」なんてことは法律には書いてありませんが、いけないことだということは皆が知っています。こんなことは大人に言うべきことではなく、子どもの時に「しつけて」おくべきです。同様に、「ルールは守る」という原則のうえに、「ルール」は成立しているのです。原則というのは、簡単に言えば、いちいち言う必要がない「④」なのです。

(高峰修「スポーツ教養入門」より)

問1 (A) (C) に入るスポーツとして最も適切なものを次のア～オから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-------|
| ア | 野球 | イ | テニス | ウ | バスケット |
| エ | サッカー | オ | ラグビー | | |

問2 — 線部①『ルール』が果たす機能」とありますが、その機能と理由を左の図のように表しました。図中の①～③にあてはまる言葉を、それぞれ二十字以内で答えなさい。

ルールが果たす機能	
1	① 全員がスポーツについて共通の理解をすることが必要。
2	暴力の抑制 ②
3	③ 「やりにくい条件」を作り出すことによって、スポーツを楽しくする。

問3 — 線部②「スポーツの基本的な考え方」の内容を説明した次の文の（ ）にあてはまる適切な言葉を、十五字以上二十五字以内で答えなさい。

スポーツは楽しんでプレーするものであり、（ ）ということ。

問4 — 線部③「こういった背景」を説明した次の文の（ ）にあてはまる適切な言葉を、文章中から六字でぬき出して答えなさい。

ラグビーやサッカーの（ ）が集まって検討して、それぞれのスポーツをおもしろくするために、反則や禁止とすべきことをルール化したこと。

問5

④

に入る言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア とても簡単なこと

イ 当たり前のこと

ウ 正しいこと

エ わかりやすいこと

2

次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

故郷の町は、東京よりもずっと西にあった。そのぶん遅い夕暮れも、もう茜色あかねいろが空からほとんど消えかかった頃ころだった。真一しんいちは小学校の校庭で、さかあがりの練習をしていた。あせていた。①悔くやしさと情けなさで泣きだしてしまいそうだった。

最初はクラスの半分近かった〈できない組〉が授業のたびに減っていき、気がつけば残り数人になっていた。その日いっしょに練習をしていた〈できない組〉の仲間も、一人また一人と「できたあ！」の歓声かんせいとともに家に帰ってしまい、②校庭に残ったのは真一だけだった。

下校のチャイムはとうに鳴っていた。暗くなった空と、町を囲んだ山なみとの境目が、もう見分けられない。北風にさらされた鉄棒てつぼうを握り直すたびに、肩や背中が冷たさにゾクツと縮んだ。

掌てのひらや指の節にできたマメが、うずくように痛む。どうしても尻しりが鉄棒より上にいかない。たまに、今度はいいぞ、というところまで来ても、下腹を鉄棒に引き寄せることができず、脚あしが地面に落ちてしまう。何度やってもだめだ。負けず嫌いの気力も萎なえて、もういいやあ、と鉄棒の下にへたりこんでしまった。

〈さかあがりの神様〉は、そんな真一の前に姿を現したのだった。

体の大きな男だった。ボアの付いた紺色こんいろのナイロンジャンパーを着ていた。校庭には明かりがないので顔はわからなかったが、なにか怒おこっているような雰囲気ふんいきだった。

学校の用務員さんだ、と最初は思った。

真一はあわてて立ち上がり、半ズボンの尻しりについた砂を払いながら、「すぐ帰ります」と言った。
「逃げんでもええ」

しわがれた低い声が聞こえた瞬間、身がすくんだ。怖かった。目を上げて顔を確認することもできない。「さかあがりの練習しよるんか」

おとな同士でしゃべるときのように、笑いのない声だった。真一は思わず「ごめんなさい」と答えたが、顎も口もこわばっていて、うまく動かなかった。上目遣いで③顔を見た。知らないひとだった。太い眉毛とギョロツとした目がいっしょにつり上がって、学校で一番おっかない山田先生よりずっと怖そうだった。

「できんのか」と男はつぶけた。怒られる、としか思えなかった。小さくうなずいたつもりだったが、男は声をさらに濁らせて言った。

「どつちな。できるんか、できんのか」

「……できません」

泣きそうになった。こんなに怖いひとに会うのは初めてだった。おとなの男のひとに怒られるのも、初めて。それ以前に、おとなの男のひとと二人きりになったことも、ほとんどない。

真一は赤ん坊の頃に父親を病気で亡くしていた。母一人子一人の暮らしだった。親戚や近所の男のひとは皆、真一に話しかけるときには優しい声をつくってくれた。その理由と、「不憫な子」の意味を真一が知るのは、ずっとあとになってからのことだ。

「怖がらんでええけえ、いっぺんやってみいや」

男は鉄棒に顎をしゃくった。逃げ出したくても、足が震えてしまっても動けない。助けを求めようにも校庭に人影はない。「おじちゃんが見ちやるけえ、やってみい」

もう一度うながされた。声がほんの少しだけ優しくなったような気がしたが、早くさかあがりをやらないと、また怖くなるかもしれない。

鉄棒につかまった。腕の幅を（A）する間もなく、地面を蹴り上げた。

今度もだめだった。腕も脚もくたくたに疲れていたし、男の視線が気になって、いままでの中でも一番ひどい出来だった。「こりゃあ、ぜんぜんおえんのう」

男は、初めて笑った。笑つてもしわがれ声は変わらなかつたが、つり上がっていた眉毛や目が人形劇の人形のように急に下がった。

怒られずにすんだ。

ほっとして息をつくくと、怯えた気持ちと入れ替わるように、悔しさと恥ずかしさと、そして悲しさが胸に湧いてきた。

お父ちゃんがおらんけん——喉を迫り上がりかけた言い訳を、うつむいて押しとどめた。

父親のいない暮らしに負い目を感じていたわけではない。母親は簿記の（B）を持っていたので生活には困らなかつたし、ものごころつく前に亡くなったのが逆によかつたのだらう、父親との思い出をたどって悲しくなることもなかつた。

それでも、寂しさは、ある。ときどき不意打ちのように胸を刺す。父親に肩車してもらっている友だちを見かけたとき、父親のこぐ自転車に二人乗りする友だちに声をかけられたとき、いたずらをして父親にびんたを張られた友だちに、赤く腫れた頬を触らせてもらったとき……。

さかあがりでも、そうだ。父親に手伝ってもらつて練習したという友だちにならつて、何日前か前、さかあがりのコーチを一度だけ母親に頼んだ。しかし、尻を持ち上げてもらおうにも、母親の細い腕では小太りの真一の体を支えきれない。地面に落ちる脚といっしょに母親まで尻餅をついてしまい、母親はまだがんばるつもりだったが、真一のほうが「もうええよ、危ないから」と止めたのだった。

眼が重くなつた。いけない、と思つたとたん、涙があふれた。歯を食いしばつたすすり泣きは、やがて嗚咽交じりの涙に変わり、最後は鉄棒に目元を押しつけて、声をあげて泣いた。冷たい鉄棒に涙の温もりが滲みていく。錆びた鉄のにおいに、しよっぱさが溶けた。

「もういつぺん、やってみい」

男が言った。濁った声を、もう怖いとは感じなかった。一度泣いてしまえば、悲しさも恥ずかしさも消えて、残ったのは誰にぶつけていいかわからない悔しさだけだった。

「今度は脚を上げるときに『このやろう！』思うてやってみい。肘をもつと曲げて、脚いうよりヘソを鉄棒につけるつもりで、腕と腹に『くそつたれ！』いうて力を入れるんじや。目もつぶとけ。そうしたら、できるわい」

真一は鉄棒を強く握りしめた。

もう一度——これで最後。

肘を深く折り曲げ、「このやろう！」と心の中で一声叫んで、脚を跳ね上げた。ヘソをつける。腕と腹が痛い。目をつぶり、息を詰めて「くそつたれ！」と叫び声を奥歯で噛みしめた。

あと少し。いいところまで来たが、これ以上、尻が上がらない。

そのときだった。

尻がフワツと軽くなった。

掌で支えてもらった——と思う間もなく、体の重心が手前に傾き、腰から上が勝手に動いた。世界が逆さに回った。自分でもなにか起きたのかわからないほどあっけなく、そしてきれいに、さかあがりは成功したのだ。

「できたじやろうが」

男は初めて笑った。思ったより遠くにいた。手を伸ばして尻を支えるには距離がある。ということは自分の力で……いや、しかし、半ズボンの尻には、掌で押し上げてもらった感触がまだ残っていた。

「もういつペンやってみい。体が忘れんよう、練習するんじや」

言われたとおり、何度も練習した。ずっと成功がつづいた。尻が鉄棒を越えるときに掌に支えられる、それも同じ。だが、成功して脚を地面についたあと、すぐに目を開けて確かめると、男はいつも鉄棒から離れたところで腕組みをして立っているのだった。

何度目だったろうか。初めて、掌に支えられることなくさかあがり成功した。

「やったあ！」

思わず声をあげて男の姿を探した。

どこにもいなかった。

神様だ、と思った。へさかあがりの神様」が助けてくれたのだ、と信じた。

(重松清「日曜日の夕刊」より)

問1 (A)・(B)に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア A 確定 B 才能 イ A 決定 B 能力

ウ A 調整 B 資質 エ A 調節 B 資格

問2 ——線部①「悔しさと情けなさで泣きだしてしまいそうだった」とありますが、真一がこのように感じた理由を、二十文字以上三十文字以内で答えなさい。

問3 ——線部②「校庭に残ったのは真一だけだった」と同じ内容を表す言葉を、本文中から八字でぬき出して答えなさい。

問4 本文中の③にあてはまる言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア すんなりと イ おそろおそろ

ウ わくわくして エ しっかりと

問5 本文の内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 真一のさかあがりの練習を手伝ってくれた男は、紺色のナイロンジャンパーを着た学校の用務員さんだった。

イ 真一のさかあがりの練習を手伝ってくれた男は、最初から最後まで怖い顔をしていた。

ウ 真一の母親は毎日さかあがりのコーチをしてくれたが、力が弱いのでうまくできなかった。

エ 真一の親戚や近所の男のひとは皆優しいので、初めて知らないおとなの男のひとに怒られて、怖かった。

3

次の文は、理学者の中村桂子さんと編集者の松居直さんの対談です。文を読み、後の問に答えなさい。

中村 (前略) 人間の手は器用で技術を生みました。火を熾したり、道具を作って使ったり。こうして今では機械を作ります。機械はありがたいものです。

最も簡単な例で言うと炊飯器。私の親の世代だと疎開先で、竈でご飯を炊かなくてはなりませんでした。薪を入れ、火を熾して、始めチヨロチヨロ中。パツパとやっていました。でも今それをやれと言われても困る。出かける前にスイッチを入れておけばおいしいご飯が炊けているのはありがたいです。つまり、①機械によつて、手を抜くことができるようになったのですね。

松居 なるほど、そういうことも言えるわけですねえ。

中村 ありがたい一方、手をかけることはもう馬鹿馬鹿しい。手を抜けるほうがすばらしいという価値観を創ったのです。ところが、生きもののことを考えてみると、**A**は手を抜けません。たとえばお花は、お水をやるのを忘れたら枯れてしまいます。手をかけてやらないと、農業高校の豚さんは育たない。

松居 手をかけて、大切に撫でて育てて、可愛がつてやることですね。

中村 子どももそうですよね。手をかけるのが生きものの大事なことです。大事にする、育てることを「手をかける」「手塩にかける」というすてきな日本語にしたのです。

松居 昔から日本では、「口も八丁手も八丁」とも言いますがねえ(笑)。冗談はともかく、②まさにそうですね……。
「言葉」と「手」ですよ。それを使うのが人間。

中村 「でも手をかけると思い通りになるだろうか」というと、そうはなりませんでしょう。**B**は手をかけないでも思い通りになりますが、手をかけても思い通りにならないものがある、それが生きものです。だから人々は「**C**はすごい。**D**は効率が悪い」と生きものにパツ(X)をつけました。産業で言えば、③自動車をどンドン作るの結

構だが、農業や漁業は他国にやらせましようと思っってしまったのですね。思い通りにならないものにはバツをつけましよう。ところが、これは、「生きる」ということにバツをつけることなのです。

これが今の社会の見直さなければならぬことではないでしょうか。東北の被災地ひさいちの農家や漁師の方の言葉がすばらしい。それを私たちみんなが実感したと思うのです。やっぱり手をかけることをやってらっしゃる人たち。きっと、それも大事にしなくちゃいけないとみんなが気がついたと思います。

松居 気がついてないと思いますよ、僕は。まだまだ――。水をかけるみたいですが。

(「リレートーク 言葉の力 人間の力」より)

問1 本文中の **A** ～ **D** には、「機械」か「生きもの」のいずれかの言葉が入ります。その組み合わせとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A 生きもの B 機械 C 機械 D 生きもの
- イ A 生きもの B 生きもの C 機械 D 機械
- ウ A 機械 B 生きもの C 生きもの D 機械
- エ A 機械 B 機械 C 生きもの D 生きもの

問2 ――線部①の「機械によって、手を抜くことができるようになった」とは、どのようなことを表していますか。次の() にあてはまる言葉を、二十字以上三十字以内で答えなさい。

昔とはちがひ、() といふ。

問3 ——線部②の「まさにそうですね」の内容として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手を抜けることはすばらしいということ。

イ 農業高校の豚を育てるのは難しいということ。

ウ 子どもは手をかけて育てるべきだということ。

エ 人はどんどん機械を使うほうがよいということ。

問4 ——線部③の「自動車をどんどん作るのは結構だが、農業や漁業は他国にやらせましょう」について、これはどのような考え方を表していますか。次の() にあてはまる言葉を、十字以上十五字以内で答えなさい。

農業や漁業ではなく、() 機械産業を中心に発展していこうという考え方。

4

次の問いに答えなさい。

問1 次の(1)～(3)の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 迷子になった男の子をホゴする。
- (2) 穀物をチヨゾウする。
- (3) ロウドウ組合の活動を調べる。

問2 例にならって、それぞれの意味にあてはまる四字熟語を完成しなさい。

例 一つのことをして二つの利益を得ること。

一(石)二(鳥)

① 性質や状態などがさまざまであること。

多()多()

② 良くなったり、悪くなったりすること。

一()一()